



四国から見えた河原節子さん80歳は、挺身隊で大阪へ働きにきていて、空襲にあい、多くの友人を失ったと。もう今を置いて誰があの忌まわしい戦争を語り継ぐことができるものかと、不自由な足に杖をつきつつ語られた。地元のかたが私財をなげうって慰霊を続けてくださることに深い感謝の念を禁じ得ないとも。そして健康の許す限り法要に参加し続けたいといわれた。

お友達4人と皆の前でとてもしっかりと話された。

もう一人両親と姉妹を亡くした方は、「4人の遺体を火葬した記憶が今も忘れられない」と語られた。

当時16歳くらいでそんな目にあつたらと、本当に戦争はこの世の罪悪であるとの感を深くした。

千人塚慰霊法要参詣、それは64年前の私の記憶と重なって、慟哭のひとつときであった。

亡くなった人たちが眠る場所。



絵:真弓百合子さん

絵:栗林幸子さん

■千人塚と絵

愛する家族を亡くし

多くの友人の死を見ることを

忘れられるわけがない。――



被災した思い、多くの友人達の死の重みを語る



両親・姉妹4人の遺体を火葬した記憶を語る



■ 東浦さんご家族

戦争はいまわしい
だからこそ語り継がなければいけない
決して記憶からなくならないように

終わりに、司会者から「長年の東浦さんのご苦勞に対し、本人はもとよりご家族の支えがあったのことでみんなで感謝の拍手を」といわれ、ご家族が始めてみんなの前に顔を見せられた。ご尊父栄二郎さん(故人)が建てられた千人塚を行政による公的な慰霊行事がないなかを、ずっと守り続けてこられたことに心より敬意を表したい。これからもきっと、ご家族が受け継いで下さることであろう。

参加者は毎年100人くらいなので、そのつもりで準備していたら、当日は150人ほどになって、椅子などの準備が追いつかず大変だったと聞いた。前日の夕刊の記事も影響したのだろうか。

後日、一人で訪れた千人塚は人の気配は無くひっそりとしていた。

ただ真夏の風が途絶え耐えられない暑さであった。(このような状態を俳句では風死すという季語を用いる)

佇みし千人塚に風死せり 貴子

64年前、前途ある幾多の命が奪われた魂の声なき声を聴いていただけたら幸いに思う。〈豊田貴子〉

千人塚資料写真 豊田 貴子